

契約妊活婚！

（隠れドSな紳士と子作りすることになりました）

## 目次

契約妊活婚！

〜隠れDSな紳士と子作りすることになりました〜

番外編 初恋はいつまでも続く

契約妊活婚！

〜隠れDSな紳士と子作りすることになりました〜

## プロローグ

大安吉日の日曜日。

料亭すずらんにて、柳風花は人生初のお見合いをするようになった。

(はあ……緊張する)

華やかな赤地の熨斗柄に牡丹と花車をあしらった着物姿の風花は、きゅつと締めあげられた帯で小さく息をしながら俯いていた。

茶色のロングヘアは美容院でアップスタイルにしてもらい、華やかなヘアアクセサリーで可愛く仕上げてもらった。だけど、明るい髪色のままお見合いに来たせいで、母からの視線が痛い。

相手の方にいい印象を持ってもらうため、少しでも清楚に仕上げて来いと言われたのに、気にせずいつも通りしてきたのは小さな抵抗だ。

メイクを美容院でお願いした際も、「華やかにしてください」とオーダーしたものだから、ラメが入ったアイシャドウが瞼の上でキラキラしている。

(二十八歳なのに、キラキラしすぎ？ さすがにやりすぎたかな……)

そう思ったところで、今更どうすることもできない。

そもそもランジェリーデザイナーとして働く風花は、いつも個性的な格好を好み、お淑やかさとは無縁。明るめの髪色が好きだし、ボーイズライクな格好も好き。時と場合によっては、ワンピースを着て女性らしい格好を楽しむのも好き。要するにファッションやメイクが好きなのだ。

そんな流行に敏感な今どき女子の風花だが、実は東京で百年以上続く皇族御用達の老舗伝統和菓子屋、永寿桔梗堂の一人娘。今は家を出ているものの、いろいろな事情から親から勧められたお見合いを受けた。風花としては結婚願望なんてこれっぽっちもないのだが、ある重要な目的があったのだ。

相手は華月屋という、言わずと知れた西日本大手の百貨店の創業者一族の次男坊。

(貫地谷傑さん、三十歳って言ってたっけ……)

二十代の男性とは違い、大人の落ち着きを感じる。大手百貨店を創設した一族の子息とあって、所作のひとつひとつが美しく、育ちの良さが窺えた。

意志の強そうな眉、奥二重のしっかりとした双眸、すっと伸びる鼻筋に形のいい唇。完璧な配置で並ぶ美しい顔は、まっすぐと風花のほうを見据えている。時折向けられる笑顔は、爽やかで素敵美しく並んだ白い歯が眩しい。

そしてミディアムほどの長さの黒髪は、彼の凛々しい顔を引き立たせていた。

(格好いいのももちろんだけど……美しいなあ)

お見合い写真で事前に彼の顔を知っていたものの、実物は思わずため息が零れるほどの美形だった。

目の前の彼を見て、柄にもなく緊張してしまふ。普段男性と接することが少ないからといって、こんなに緊張するなんて自分自身でも驚いている。

食事も終え、あとは若いふたりで……と言われ、部屋から両親と仲人が退室する。

風花は目の前にいる美男子にどう話を切り出せばいいか、タイミングを見計らいながらバクバクと胸を高鳴らせていた。

「あの……貫地谷さん、お話があるのですが」

「はい、何でしょう？」

イケメンがふんわりと顔を緩ませて微笑む仕草に、つい見惚れてしまふ。眼福とはまさにこのこと、ずっと見つめていたい気持ちになり目が離せない。

優しい眼差しを向けられ、さらに鼓動が速くなる。

（ああ、緊張する。心臓が口から飛び出しそう）

今から提案することを聞いたなら、どう思うだろう。下手すれば怒らせてしまふかもしれないと思いつつも、話があると切り出してしまった手前、後に引けなくなった。

躊躇ってなかなか話し出せないでいると、傑は不思議そうな表情を浮かべる。しかし急かすことはなく、ゆっくりで構わないと大人の余裕で包み込んでくれる。

どこまでも素敵だなど思わざるを得ない。

（言え、言うんだ。私！）

しばらくして心の準備が整った風花は、すうつと息を吸い込み、ゆっくりと話し出した。

「あの……ですね。私、子どもが欲しいんです」

たっぷりと間を空けて話したことがそれか、と驚いた様子を見せたあと、傑は嬉しそうに微笑む。

「はい。それは僕も同じ気持ちです。結婚するからには、家族が増えてほしいと思います」

「あ、いえ……そういう意味ではなくて。子どもだけが欲しいって言うか……」

「え？」

あまりにも不躰なことを言っている自覚があるため、どんどん声が小さくなる。

穏やかだった傑の表情がみるみるうちに硬くなって、さっきまでの柔らかい雰囲気と笑みが消えた。

「……それは、どういうことですか？」

「えっと……入籍せずに、私と子作りしてもらえませんか？」

そう、これが風花がお見合いを受けた、重大な目的だった――

## 1

遡ること、一週間前。

父から「新作の和菓子が完成したから食べに来い」と呼び出され、久しぶりに実家に帰ったことから、この件は始まった。

風花は現在、実家には住んでおらず、実家から二駅離れた場所でひとり暮らしをしている。

風花の手掛けるデザインが人気になり、大手下着メーカーのランジェリーデザイナーとして少しずつ名が知られてきたところだ。

高校在学中に友人に貸してもらったファッション雑誌を見て、それまで知らなかったジャンルの服やモデルたちに感銘を受けた。

今まで自分は清楚で大人しい格好ばかりさせられていたが、世の中にはこんなに刺激的で個性的な服があるのだと驚いた。それだけじゃない。肌の露出の多い服だったりボーイッシュな服だったり、様々なものがある。

それらに興味を抱いた風花は、やがて自分も服のデザインをしてみたい、自分の考えた服を作りたいと考えるようになった。

エスカレーター式のお嬢様学校に通っていた風花だったが、反対する両親を必死に説得し、高校を卒業後はファッションの専門学校を選んだ。その結果、デザイナーになるという夢を叶えたのだ。両親は風花に和菓子屋を継いでほしいと望んでいたし、自分たちの代で永寿桔梗堂を終わらせてはいけないと思っている。だから今でも「気が変わらない？」と聞かれることがあるが、その都度断っている状況だ。

(だって……私には好きな仕事があるし)

なりたくて、なりたくて、必死に勉強して、コンテストで受賞して、努力を積み重ねてやっと手にした仕事だ。簡単に手放すなんてできない。

(永寿桔梗堂のことは好きだし大切だけど……でも、自分のやりたい仕事を捨てることはできない)

そう、好きだけど継ぐ気にはなれない——それが風花の気持ちだった。

実家への帰り道にそんなことを思い返しつつ、今回の父の和菓子はどんな出来栄だろうと想像して胸を躍らせる。

風花は小さい頃から、和菓子に囲まれて生活していた。

季節ごとの新作や、この時期にしか食べられない和菓子がある。夏が終わり、そろそろ秋めいてきたこの時期は、秋の看板メニューの栗蒸しようかんがイチオシだ。

ようかんの上品な甘みともっちりとした食感、大きな栗のほっくり感が味わえる贅沢ぜいたかな一品で、風花の大好きなお菓子だった。

毎年風花に一番に食べてほしいという父の希望もあって、今回誘いを受けたのだ。

風花の実家は、東京の中でも富裕層が暮らす高級住宅街にある。祖父の代から住んでいる日本家屋の周りには立派な庭が広がり、家の中はガラス張りになっているところが多い。どこからでも立派な日本庭園を眺められるように設計されている。

いつも通りに家に入ってすぐにリビングへ向かうと、そこであるものを発見した。

「お父さん、何これ……」

今日は休みだという父と、専業主婦の母がニコニコとしながらこちらを見ている。その笑顔が何

だか怪しくて、風花は眉根を寄せる。

テーブルの上に置かれたフォトアルバムを恐る恐る開けてみたら、そこにはスーツを着た端整な顔立ちの青年が写っていた。

（誰、これは？）

若い頃の父とは違うし、従兄弟にこんな人はいなかったはず。これは誰かと聞いてみると、父が喜々として話し出した。

「この人は貫地谷傑さんといって、華月屋の社長の息子さんだ。風花のお見合い相手にどうかって、知り合いからおすすめされたんだ」

「へえっ!？」

「風花の旦那さんになるかもしれない人だよ」

「い、いやいやいや……」

（私がお見合い？ 突然、何を言い出すの）

写真に写っている男性は、ものすごく素敵な人だと思う。

写真の姿しか見ていないが、爽やかで優しそうで、真面目な感じが伝わってくる。

大手百貨店、華月屋の社長の息子だというのだから、家柄もいいのだろう。

文句のつけようがない素晴らしい人だとは思うもの……いきなりのこと拒絶反応が起きてしまふ。

「私はいいよ、結婚願望ないし」

「風花ももう二十八歳なんだよ。このまま一生独身なんて、お父さんは悲しい」

「そうよ。三十代になる前に結婚相手を見つけておいたほうがいいわ。素敵な男性は、すぐに売切れるものなのよ」

両親揃ってお見合いを猛プッシュしてくるので、思わず後ずさる。

「私、今は仕事に夢中だし、結婚して誰かと一緒に住むなんてことも想像できないよ。相手は由緒正しい家柄の人みたいだし、結婚相手には専業主婦になってほしいと思ってるかもしれないじゃない」

現在、風花は次のシーズンに出る下着のデザインを担当している。風花がそのティーン向けのブランドを担当するようになって、劇的に売り上げが伸びた。

今の仕事は、数々のコンテストに応募して実績を積んで、たくさん営業にも回り、苦労して手にしたものだ。やっと自分のデザインが認められて仕事が安定してきたのに、それを手放して家庭に入るなど考えられない。

「会う前から無理だと決めつけるのはいけないよ。彼はそれでもいいと言ってくれるかもしれないだろう?」

百聞は一見に如かずと言うし、会ってもいない人を最初から否定するのはよくないというのは分かっている。

しかし乗り気でないのに、わざわざ時間を作ってもらうのは、相手に対して失礼だと思う。

「悪いけど、断っておいてくれる?」

「お願いだ、一回だけ会ってみてくれ。先方との付き合いもあるし、無下にはできないんだよ」  
「お願い、風花」

断つてもふたりがかりで懇願されて、逃げ場を失う。

取引先の人からの紹介ならば、厚意を突っぱねるのが失礼にあたるのは分かる。父が断れない性格なのも知っているので断るのは可哀想だけれど、安請け合いはできない。

「仕事が好きで結婚願望がないことは理解しているつもりだよ。風花の人生だから、好きに生きて幸せでいてくれたらいい。だけど、結婚を悪いものだと思ってしまうのは、勿体ない。してみたいなと分からないことはたくさんあるし、案外いいものかもしれないだろう？」

やってみてダメなら、離婚すればいいだけのこと。一度きりの人生なのだから、何事も経験してみるべきだと説得が続く。

(まあ……確かに、そうだけど……)

「あと……この永寿桔梗堂のことを少しでも思うなら、跡継ぎ問題を一緒に考えてほしいんだ」

永寿桔梗堂は、高祖父から代々継いできた大切なお店なので、父の代で終わらせてしまうことだけはしたくないと言う。

一人娘の風花が継ぐつもりがないのは理解しているが、店を継続したい気持ちと、結婚相手が継いでくれるのではという期待があるようだ。

「この……貫地谷さん？　って人は、継いでもいいって言っているの？」

「華月屋の次男さんだから、継いでくれる可能性があるね。そこは相談する必要があると思う。あ

とは、子どもができれば……その子が店を継いでくれるかも、なんて」

今まで目を逸らしていた永寿桔梗堂の跡継ぎ問題。父は、外部から来た人に会社を譲ってしまうことに抵抗感を抱いている。大事にしてきた店だからこそ、家族で守っていききたいという気持ちが高いことは昔から知っていた。

今まで風花が何不自由なく生活してこられたのは、間違いなく両親のおかげだ。一人娘ということもあって、小さい頃から大事に育ててもらったし、裕福な暮らしをさせてもらった。

風花がファッションの専門学校へ行きたいと言ったときも、自分のやりたいことを優先させてくれた恩がある。

風花のことが大事だからこそ、永寿桔梗堂の未来よりも娘の気持ちを優先してくれた優しい両親だ。そんな両親の願いを無下にはできない。

(子ども……か)

確かに父の言うように、風花に子どもができれば、その子が永寿桔梗堂の後継者になってくれる可能性がある。

自分がしたくないから押し付けるというわけではないが、その子がしたいと興味を示してくれるなら話は別だ。

(あくまでも、少しの可能性が生まれるっただけ……)

そもそも風花がこんなに結婚願望がなくなってしまったのには、過去の恋愛経験が影響している。男性と交際したのは、学生の頃一度だけ。



ファッションの専門学校の同級生で、風花と同じようにファッションデザイナー専攻の個性的な男性だった。同じ道に進んでいることもあって、一緒にいるのが楽しかった。

しかし、初めての彼氏に舞い上がって、喜んでいたのも束の間。

課題に忙殺されている間に、学校以外で会う時間がなくなってしまった。これではいけないと彼の住むマンションへ突然訪ねたところ、同じクラスの女子と浮気しているところを目撃してしまったのだ。

それから何年も恋人がいない。もう恋愛などしなくていいと固く決意するほど、あのときは傷ついていた。

(結婚して浮気なんてされたら、絶対に立ち直れないし)

男性全員が浮気するとは思わなかったが、最初から期待しないようにと、予防線を張るようになってしまった。心底信頼してしまったあとに裏切られるのは辛いから。

その点、仕事は裏切らない。

努力したぶんだけ、成果が得られる。たまにうまくいかないときもあるけれど、自分のやりたいことをやっているのだからと、どこまでも頑張れる。

そういうわけで、風花は恋愛に対して完全に心を閉ざしてしまったのだ。

(そんな私が、結婚なんて絶対ムリだよ。なのに、子どもができたらなんて飛躍しすぎだ)

一瞬、微かな光を見出した気がしたもの、自分のトラウマを思い出してしまうくらいだろうか。と淡い期待をかき消す。

「風花、お願いだ。一度会ってみるだけでいいから」

父の懇願するような声から察するに、断れば相手との関係が悪化してしまうのだろう。ここは両親のために一度会うべきかと観念する。

(子ども云々より、まずはお見合いをどうするかが問題よね。とにかく一度会うしかないか)

「……分かったよ」

「ありがとう、風花！」

新作の和菓子を食べに行ったはずが、まさか見合いの話がされるとは。まんまと引かかってしまった、と悔しく思いながらマンションへ帰る。

「はあ……」

両親から受け取ったお見合い写真をもう一度見て、非の打ち所がないイケメンに話しかける。

「私と会ったことがないのに、どうしてお見合いしようなんてしようと思ったの？」

写真に話しかけても、返事なんてこない。それでもいろいろなことを考えて、ああでもない、こうでもない頭を悩ませる。

「子どもができれば……」

父の言葉を思い出して、もし自分に子どもがきたら、と想像する。

結婚願望はないものの、自分の子どもには興味がある。

一生独身でもいいけど、我が子を見てみたい。どんな顔で、どんな性格で、どんな人生を歩んでいくのだろう。興味がある。

誰かのために自分のライフスタイルを変えるなんて考えられないけれど、自分の子どものためであれば、受け入れられるような気がする。どんなに大変でも子どものためならいいと思えるに違いない。

出産した友達が、「自分の子どもはすごく可愛い!」と幸せそうにしていた顔を思い出すと、途端に子どもと支え合って生きていきたい気持ち溢れてきた。

ふわふわで、繊細で、天使のような自分の子どもを抱っこしている場面を想像して、胸が高鳴る。「これって……アリ、かも」

結婚せずに子どもだけ産む。そういう人も、最近いると聞く。

だったらこのお見合い相手に、その相手になってもらうのはどうだろう？

よく知りもしない風花とお見合いをすると決めている人だ。風花のことに興味が無いわけじゃない。その上、素性も分かっているし、安心だ。

それに、彼が承諾してくれるのなら、精子だけ提供してもらって人工的に子どもを作ることできる。風花としても、好きでもない相手とそういう行為をするのは気乗りがしない。

問題は、相手にどう持ち掛けるかだ。彼には何と言えればいい？

結婚せずに子どもだけ作りたいなどというんでもないことを、果たして聞き入れてくれるだろうか。

「ああ……無謀かな……」

いいアイデアが浮かんだと思っただが、現実はそう甘くないだろう。

「もし、受け入れてくれそうな人なら……」

結婚はせずに子作りだけ協力してもいいと言ってくれそうな人なら、相談してみてもいいかもしれない。

これは一か八かの大きな賭けだ。彼が協力者になってくれるかどうかで、この計画が遂行できるかが決まる。

あとは当日に本人の様子を見て、判断しようと思った。

——そして日曜日。

「本日はお日柄もよく、このたびは貫地谷家御子息、傑様と柳家ご息女、風花様のお見合いということで、私、おか系の当主である岡江佐兵衛がおふたりの顔合わせの仲人をさせていただきます」

仲人である岡江佐兵衛は、七十を過ぎた恰幅のいい貫禄のある男性だ。

渋い色の色紋付を見事に着こなす岡江は、どこからどう見ても一流の風格で、全体の空気が締まるのを感じた。

おか系とは京都に本店を構える老舗呉服店。舞妓や芸妓の衣装提供をしており、誰もが知る有名企業である。その会長である岡江の計らいで、今回の縁談が舞い込んできたらしい。

「貫地谷さんは、華月屋を創業されたご一族です。お父様であるこちら、龍之介さんが現在の代表取締役。その次男様が、今回風花さんにご紹介する傑さんです」

「どうも」

岡江が紹介した男性——僕は、風花に向かつて軽く頭を下げる。

実物を見て、女性に困らないであろうルックスだ。何度見てもため息が出てしまうほどの男前で、「お見合いなんてする必要ある？」と本当に不思議に思う。

フルオーダーであろう仕立てのいいスーツに身を包む僕を、隣にいる風花の両親も「素敵なのだ」と見惚れていた。

「現在、僕さんもお兄様とともに華月屋の役席としてお仕事されています」

華月屋の跡取りになるのは長男で、彼が社長になったあと、僕がその補佐をする予定なのだとか。「こちらは、柳風花さん。永寿桔梗堂のお嬢様です。永寿桔梗堂さんには蒔物菓子まきものかしの用意をするときに本当にお世話になっていましたね。毎回こちらにお願いしているんですよ」

永寿桔梗堂は、生菓子や半生菓子、干菓子など、あらゆる和菓子を取り扱っている。おか系は鼠ねずみ屑くずにしてくれる上顧客で、事あるごとに永寿桔梗堂を利用してきていた。

「お嬢様だなんて、そんな」

褒めてもらうような存在ではない、と風花は岡江の紹介に恐縮する。

(はあ……なんだかいたたまれない)

そんなことを心の中で呟つぶやいていると、僕がにこやかに話しかけてきた。

「風花さん、そんなご謙遜けんそんを。永寿桔梗堂さんは、うちの百貨店でも大変人気のブランドです。わざわざこちらのお菓子を買うために遠くから足を運ばれるお客様も多いんですよ」

華月屋の関西店舗にどうしてもお願いされて、一年前から永寿桔梗堂の和菓子の販売を始めた。

それまでは関東でしか手に入らなかった高級和菓子ということもあって、とても人気らしい。

しかし、風花は店の経営に関わっていないため、そのあたりの事情がよく分からない。どういう反応をしているか困っていると、風花の父が話し出した。

「僕さんは、うちの店を継いでもいいと思ってくださいっていると聞きましたが」

「はい。華月屋は、兄が継ぐ予定ですし、僕が抜けても問題ありません。それよりも伝統ある永寿桔梗堂さんが後継者として必要だと思ってくださいさるのなら、僕は力になりたいと思っっています」  
(えええーっ。そうなの？ これじゃあ、ますますお父さんが気に入っちゃうじゃない)

何が目的なのだろう？ と風花は怪しむ。

もしかして彼は、永寿桔梗堂を継ぎたくてこの結婚を決めたのだろうか。

しかし華月屋の息子だ。事業も成功しているし、お金に困っている感じでもない。

わざわざ他の事業に携たずわりたいたなんて、もしや僕は変わり者なのだろうか。それとも華月屋の跡継ぎ問題で採とめている？

何か裏があるのではないかと不審に思っ警戒するが、会話の端々からそういったものは見当たらない。僕の両親もとても感じのいい人たちで、ただ純粹に息子の結婚を望んでいるふうに見える。

「風花さんは、ランジェリーデザイナーなんですよ。なかなか就ける仕事ではないですし、好きなことを仕事にできるなんてすごいですね」

「はは、どうも……」

「結婚したあと、お仕事は続けてもらって構いません。最近では夫婦共働きの家庭が多いです

から」

しかも仕事に対しても理解のある人だ。

結婚相手として申し分がないのに、さらに風花の実家の跡継ぎになってくれるという。これ以上ないくらい好条件な人だろう。

(でも、やっぱり結婚は、ちよっと……)

恋愛結婚ならまだしも、お見合いで結婚などしたら、愛情がない結婚生活を送ることになるかもしれない。ふと、浮気をされた過去が頭を過る。あんな惨めな思いをしながら結婚生活を送ることを想像するだけで、身の毛がよだつ。

今回のお見合いは、顔合わせをしてみても大丈夫そうなら子作りのことを提案し、その用件が済んだら破談にするつもりでやってきた。

傑も乗り気でないことを期待したが、そうではなさそうだ。家のために結婚すると覚悟しているのか、単純に風花のことを気に入っているのかは分からない。

「風花さんは、乗馬が趣味なんですか？」

「あ、はい……。昔、習っていたことがあります」

「僕もなんです。一緒ですね。なかなか乗馬をやっていたという人と出会わないので嬉しいです。共通の趣味があるっていいですね」

傑は、口数の少ない風花に気を使ってか、この場を和ませようと話しかけてくれる。答えやすいような話題ばかりなので、返事がしやすい。

(貫地谷さん、女性に人気だろうな。感じもいいし、御曹司だし。いい大学を卒業しているみたいだし、頭もいいなんて、悪いところが見つからない)

風花の契約している大手下着メーカーの女子たちに話したら、「その人、紹介して!!」と血眼ちまなこになつて言われるだろう。

(ほんと、何でお見合いなんてしたんだろう)

そんな疑問を抱きつつ、両親とともに食事を済ませると、風花は傑と部屋にふたりきりにされた。「ふたりきりだと緊張しますね」

「そうですね……」

はは、と笑いながら、傑は話しかけてくる。足を崩しましよと言われ、お互いに正座から座りやすい姿勢に変えた。

「風花さんは、やっぱり和菓子が好きなんですか？ 洋菓子はどうですか？」

「洋菓子も好きですよ。何でも食べます」

「そうですか。美味しいケーキ屋があるんですが、知っていますか？ 季節のフルーツをふんだんに使ったタルトが絶品の、ラグジュ・ボヌールという店なんですけど——」

「え、ラグジュ・ボヌールですか!? あそこって、半年くらい予約しないと買えない店ですよ？ どうして買えるんですか？」

思わず身を乗り出して尋ねてしまった。ちょうど、ラグジュ・ボヌールのぶどうや柿、イチジクがたくさん載ったオータムフルーツのタルトを一度でいいから食べたいと思っていたところだった

のだ。

「僕は百貨店勤務ですから、バイヤーの繋がりがあるんです」

「そうなんですか、羨ましいです」

「じゃあ、今度一緒に食べましょう。風花さんの欲しいものを教えてください。用意します」

「いいんですか？」

タルトが食べられる！ と舞い上がったあと、ふと我に返って俯く。

(何を楽しんでるの！ 相手のペースに吞まれて会話している場合じゃない)

結婚の意志はないが、例の件をお願いしたいという話をするために今日来たんじゃないか、と自分自身に言い聞かせる。

(それにしても格好よすぎる……直視しづらいな)

向こうは風花のことを品定めするように、上から下まで見てくる。

こんななじつと見られたら、メイクが濃いだとか、思っていたよりも髪の色が明るいだとか、よく思われていないのではないかと不安になってくる。

清楚なお嬢様ではないと、がっかりさせてしまったかも。

(いやいや、気に入られなくてもいいんだけど)

だから相手から断られたら、それはそれでいいと思っている。

しかし――

「風花さんとお会いできて、嬉しいです。ずっと話してみたいと思っていたんですよ」

予想外にも、傑はふたりきりになっても好意的な態度を取ってくる。もしかして、本当に結婚する気なのだろうか。

しかし風花と結婚するということは、永寿桔梗堂の未来を背負わなければならない。跡継ぎのない柳家にとって、風花の結婚相手になるイコール永寿桔梗堂の跡継ぎになることを指している。

傑はそれでもいいと今回の見合い話を承諾しているようだが、本当に納得しているのかまでは不明だ。そのあたりを探るため、聞いてみることにする。

「あの……貫地谷さんは、仲人さんに言われて、仕方なくここに来たわけではないのですか？」

「違いますよ。自分の意思で来ました」

「そうですか……」

自信たっぷりそう答えられ、乗り気でないのが自分だけだったと思い知る。

そうなると、彼は風花を結婚相手として認めているということだ。

すなわち、この先の人生と一緒に歩んでもいい相手だと思ってくれているということ。

(つてことは……もしかしたら、もしかする?)

この人なら、子どもだけ欲しいという風花の協力者になってくれるかもしれないと思い始める。

(これなら、頼めるかもしれない)

傑の優しい雰囲気と真面目そうな気質を見て、信頼できる人だと判断する。

結婚に興味がないとはいえ、自分の子どもを見てみたい気持ちが再び急速に膨らんでいく。できれば男の子を育ててみたい。

出産にはタイムリミットがあると聞くし、早いうちに産んでおいて損はないだろう。

もし孫が生まれたら両親も焦らなくて済むかもしれない。今は一人娘の風花に全てを託せないかと必死だが、孫が生まれればその子が永寿桔梗堂を継ぐ可能性が出てくる。

(子どもに押し付けるわけじゃない。だけど、その子がかもし和菓子に興味を持つて継ぎたいって言ったら、そのときは継がせてあげたい。嫌ならそのときに改めて後継者問題を考えるところ)

そう決めたのなら、行動あるのみ。

他愛もない話をいくつかしたあと、風花は緊張しながら話を切り出した。

「あの……貫地谷さん、お話があるのですが」

「はい、何でしょう？」

今から突拍子もないことを言われるとも知らずに笑顔で答える傑を不憫に思いつつ、本題に入る。

「あの……ですね。私、子どもが欲しいんです」

「はい。それは僕も同じ気持ちです。結婚するからには、家族が増えてほしいと思っています」

「あ、いえ……そういう意味ではなくて。子どもだけが欲しいっていうか……」

「え？」

何を言っているのだろうと、不思議そうにしている傑の表情に緊張する。

「……それは、どういうことですか？」

「えっと……入籍せずに、私と子作りしてもらえませんか？」

「入籍……せずに、ですか……？」

一瞬の間があつて、傑の表情から笑みが消える。

「はい。私、結婚願望がないんです。今、好きな仕事をして、ひとりで生活していることに満足しています。しかし親がどうしても結婚してほしいと言うので、今日お見合いに来ましたけど……実は全然乗り気じゃなくて。でも子どもは欲しいと思っっているんです。この先一生結婚しないような気がするので、子どもだけでも産んでおきたいです」

「結婚、したくないんですか……」

「そうですね。今はそんな気になれません。仕事が楽しいので」

十八歳の頃から実家を出てひとり暮らしをしていることもあって、他人の生活に合わせる自分が想像できない。好きな時間に起きて、仕事をして、徹夜したり一日中寝たり、好き放題している。

ただ、子どものためだったら、できると思う。血を分けた家族だし、どんなことがあっても乗り越えられる気がするのだ。

「話を戻しますが、そんな理由があつて、貫地谷さんに協力していただきたいんです。婚約していたら、そういう行為をしても不自然じゃないですよ。妊娠したら婚約解消してもらって大丈夫です。性格の不一致とか、私のせいにしていただければ……」

付き合つてみて性格が合わなかった、でも子どもはできてしまった。だから、結婚はしないけれど出産するという流れに持つていけば辻褄が合うと考えた。

「私……こういうことを頼める男性の知り合いがいなくて。だから、今回貫地谷さんにご相談したんです」

仕事ばかりで、恋愛とは何だろうと思うほど、色恋沙汰からかけ離れた生活を送っている。出会いもないし、男友達もない。仕事関係もほぼ女性ばかりだ。

そんなとき現れたお見合い相手の貫地谷傑。しかも傑はとても魅力的な男性だ。もし今回の縁談が破談になっても、問題なく次の相手が見つかるだろう。

「認知してもらわなくて結構ですし、一切子どもの責任は問いません。安心してください。何なら誓約書をお作りします。あなたが父親であることも絶対に明かしません」

懸念材料を少なくするため、風花は必死で説明する。けれど、言葉を重ねれば重ねるほど傑の表情がどんどん暗くなっていく。それにともない、なぜか不穏な空気を感じた。

(気を悪くしたかな、こんなことを言われて……)

友達に「風花は前触れもなく突拍子もないことを言うよね」と指摘されることがあるが、傑もそう考えているに違いない。思ったことはすぐ行動に移してしまう性分を少し反省する。

「すみません、変なことを言い出して」

「いえ……」

ひとこと謝ってはみるものの、傑の表情は冴えない。今から大いに非難されるのでは、と風花は縮こまる。

「もし僕が承諾しなかったら、どうするつもりなのですか？」

「それは……えっと……。誰か協力してくれる人をこれから探します」

男性との出会いは皆無だが、それでも何とかして探すしかない。

「他を、探すんですか……」

さつきまでの温かみのある茶色ではなく、真っ黒闇に堕ちて光を失ったような瞳に睨まれる。

(ひえ……っ、何か地雷でも踏んだ!?)

永遠のように長く感じる沈黙が続く。

やはりコケにされたと怒っているのだろうか。イケメン御曹司の傑のことだから、今まで女性からこんなぞんざいな扱いを受けたことはない、気分を悪くしたのかもしれない。

両親も仲人も、こんな険悪なムードで話し合っているなどは想像もしないだろう。

ビクビクと怯えながら、風花は傑の返事を待つ。

「……分かりました、その役目、引き受けます」

傑は凄みを感じる真顔から一変、ぱっと笑顔に切り替えた。

(今、いいって言ったよね？ ってことは、オッケーしてくれたってことだよね?)

「ほ、本当にいいんですか？」

「いいですよ。その代わり、こちらにも条件がありますから」

含みのある言い方に、風花はごくり、と唾を呑む。

「あの……条件って、何ですか？」

「子どもができるまでの間、月に数回、僕のために時間を作ってください」

それはどういう意味なのだろう、と首を傾げると、傑が神妙な顔つきで話を続ける。

「僕と定期的に会って、婚約者のふりをし続けてほしいんです」

「え……？」

（婚約者のふりを続ける……？ なぜ？）

自分のことは棚に上げて、変なことを頼まれたと驚く。

「今回、お見合いを受けたのは両親を安心させるためでした。なのでそれなりに乗り気な振る舞いをしていましたし、あなたの家業を継ぐことも承諾していました。いったんはお見合い話を進めて、一定期間経過したら解消をお願いしようと思っていたんです」

「そうなんですか……」

「僕も適齢期ですし、両親から結婚をしてほしいと望まれています。あなたと婚約していれば、口うるさく言われなくてもいいです。最終的に破談になったのなら、傷ついたふりもできますので、しばらくは結婚をすすめられずに済むでしょう」

「確かにそうですね」

「なので、しばらくの間、僕の婚約者として過ごしてください」

僕には傑なりの理由があるのだと納得する。こんなにハイスペックな人と恋愛したい、結婚したいと望む女性はいっぱい。だけど、解消前提で婚約してくれる女性となると、すぐには見つからないだろう。その点、風花はお互いにメリットがあって婚約することになるので、後腐れなく付き合えるということか。

それならできると返事をしようとしたところで、僕は思い出したように口を開いた。

「ちなみに、子作りって簡単に言いましたが、まさか精子だけ提供してくれとかそういうことですか？」

「え……っ」

ご名答、とは言い出せず、風花は顔を引きつらせる。

「それだったら、僕はお断りします。こちらの条件としては、ちゃんとした自然な方法で作ることです。それができるのなら、このお話を受けます」

「えええーっ」

まさかそうくるとは！

（なんで、なんで!? 貫地谷さんの手を煩わせたくないのに、どうしてそんなことを言い出すの？）興味のない女と寝るなんてこと、普通はしたくないだろう。

なのに、営むことを条件に出されるなんて理解に苦しむ。

この条件は一步も譲りませんよ、という傑の強気な態度に、風花は思わずたじろいだ。しかし、なぜ自然な方法を取ることが条件なのだろうか。

（もしかして貫地谷さんは、絶賛セフレ募集中だった？ 結婚しなくていいのなら、セフレにでもしてやろうという魂胆なのかな……？）

風花は自分から酷い提案をしたにもかかわらず、何を企んでいるんだろうと彼を警戒する。

「誤解しないでください。僕は、セックスがしたいわけではありません。そちらに関して不自由な思いをしているわけではありませんから」



(わあ……！)

生身の男性の口から「セックス」というワードが飛び出したことに、内心で激しく動揺する。

「僕も子どもは好きなので、父親になるのなら、ちゃんとした手順を踏みたいだけです。籍は入れないにしても、父親になるのだから、それなりの責任を感じて子作りをしたいんです」

つまりは、精子を渡すだけでは、実感が湧かない。ちゃんと行為をして、我が子を作るべきだということか。どうやら彼には譲れないこだわりがあるらしい。

「この条件が受け入れられないのなら、この話はなかったことにしましょう。風花さんからこんな提案を突き付けられました、とあなたの両親に話してもいいんですよ」

「ぐ……」

それを言われると、何も言い返せなくなる。

こんな失礼極まりないことをお願いしたなんて両親にバレたら、激怒されるだろう。

「で、でも、子どもと一緒に育てることはないんですよ？ 父親の実感が湧いたら、子どもを手放すのが惜しくなりませんか？」

「大丈夫です、心配ありません。妊娠したら、そのあとは潔く身を引きます」

「そうですか……」

きつぱりと言い切られると、それ以上突っ込めなくなる。

ただ単にセックスがしたいだけというよりは、子どもを授かるための過程と一緒に味わってきたいということか。確かに新しい命を作っていくのだから、淡々とした作業であるよりはいいかも

しれない。

しかし――

「私と……そういうことが、できるんですか？」

「はい。できます」

恥ずかし気もなく堂々と答える傑が清々しい。

男性は、愛情がなくても性行為ができると聞いたことがある。愛情と性欲は別物なのかもしれない。

そもそも、こちらから提案した子作りなのだから、恥ずかしがっている場合ではない。

傑のように割り切るべきだと自分に言い聞かせる。

(こっちだって生半可な気持ちじゃないんだから)

ひとり育てていく覚悟があつて、この提案をしたことを改めて心に刻み、自分を奮い立たせる。

「分かりました。それをお願いします」

「では、後日この件について詳しく決めましょう」

まるで仕事のアポを取るように、次に会う日を決めた。そうして、善は急げということで二週間後の週末、傑の仕事が終わったあとと食事に行くことになった。

見合いのあと、両親に傑とこのことを前向きに考えていると話すと、すごく喜んでくれた。まさか、ふたりが子どもを作るためだけに婚約するなんて微塵みじんも思っていないだろう。嘘をついているようで罪悪感が胸が痛んだ。

(けど、後には引けない)

やると決めたら、やる。

固く決意した風花は、平日の間に自分でできることを進めた。

傑と次に会うまでに、お互いの体の問題がないか調べておこうという話になったのだ。

ネットで調べて、家の近所のクリニックへ向かい、プライダルチェックを受けた。その結果を見て、ほっと胸を撫でおろす。ここで何か問題があったら、前途多難になっていたはずだ。まずは第一関門を突破した。

そんなとき、スマホにメッセージが届く。

誰からだろう、とメッセージアプリを開けると、貫地谷傑と名前が表示されていた。

【今日の七時に、風花さんの自宅まで迎えにいきます。場所を教えてください】

「ひえっ」

傑からの連絡に胸が跳ね上がる。

(そうだ、今日会う約束をしていたんだった)

男性からのメッセージに慣れていないため、風花は慌てふためく。

すぐさま【迎えに来てもらうなんて申し訳ないです】と返信した。男性に自宅の場所を教えるなんてしたことないし、聞かれても大体の場所しか言ったことがない。

しかし、ふと考え直す。傑はそこまで警戒しなくていい相手だった。

一応、風花の婚約者であるし、妊活協力者なのだ。自宅の場所を知ったところで、悪さをするよな男性ではない。

「そうか……貫地谷さんには教えてもいいのか」

そんなことを考えていると、もう一度メッセージが届いた。

【気にしないでください。車で迎えにいきますので、自宅付近の地図を送ってください】

そう言ってもらえるのなら、と自宅位置を示した地図のURLを送った。

傑と会うことに緊張しながら、ソファから体を起こす。そして夕方までもう少し仕事を進めようと、ローテーブルに置いてあるタブレットを起動した。

来年の春夏シーズンのブラジャーのデザインを考え、ある程度できたところで出かける準備に取り掛かる。

「さすがに今日は、何もしないよね」

妊活をお願いしたものの、今日は今後のことを話し合うために会うだけ。何もしないはずだから、

気負わずに会いにいと考える。

しかし、男性とふたりきりで出かけるなんていつぶりだろう。何を着ていくべきか頭を悩ませながら、お風呂に入る。その結果、服は上品なワンピースを着ることにした。

夜になると肌寒いかもしれないので、カーディガンを肩からかけると、どこからどう見てもお嬢様スタイルに仕上がった。御曹司の隣に相応しいであろう格好になったと満足する。

約束の時間の少し前に、待ち合わせ場所に決めたマンションの近くのコンビニの前に向かうと、すでに傑の車が停車していた。

「わ……」

ドイツ製の高級車の前に立って、風花が来るのを待っている。

雑誌の一ページのように様になっっている彼の姿はスタイリッシュで、周囲を歩く女性の視線を集めていた。スリーピースのスーツを着て、腕時計を見ている長身のイケメンは、そこにいるだけだから目立つ。

街中で見ると、こんなに輝いて見える人だったのかと、改めて傑の格好よさを実感してしまった。しばらく遠目から見ていると、傑は腕時計から顔を上げ、周囲を見渡した。風花の姿を見つけた途端、ぱつと表情が明るくなる。

「風花さん、こちらです」

（ああっ、そんなふうに呼ばないで……）

傑がそう声をかけると、周囲にいた女性たちの視線が一斉にこちらに向いた。

あの素敵な男性の相手がどんな女性なのだろうと、品定めするような鋭い視線が痛い。

傑は風花のもとへ近づくと、手を差し伸べてエスコートしようとする。

「いや、あの……」

「手を貸してください」

こんな扱いされるなんて初めてで、どうしていいか分からない。しかし傑にとっては普通のことらしく、流れるような仕草で風花の手をそつと掴む。

彼に導かれるまま車の傍まで歩くと、助手席のドアを開いて座るよう促された。

（すごい……貫地谷さん、王子様みたいだ……）

小さい頃から躰けられ、自然と身についているのであろう仕草の数々に圧倒される。

運転席に乗り込んできた傑は、エンジンをかけると風花のほうへ顔を向けた。

「僕の家に行こうと思いますが、いいですか？」

「え……っ、家ですか？」

今日は、てっきりレストランにでも行くのかと思っていたのに、まさか家とは。

自宅はもう少し仲を深めてから行くべきなのではと返事に戸惑っていると、傑が風花の様子を窺いながら話を進める。

「そんなに警戒しないでください。子どもを作る云々の話を外でできるわけがないでしょう。個室の店だったとしても、従業員は必ずいますから」

「ごもっともです……」

「では、向かいますね」

そう言って車を発進させようとした傑だったが、助手席でカチコチに固まっている風花を見て、ふっと笑った。

「な、何ですか……?」

「風花さん、意識しすぎですよ。もう少しリラックスしてください」

「は、はい」

「何の変哲もない面白味のない部屋ですから。あまり期待しないでくださいね」

「またまた……」

緊張で口数が少なくなっている風花を気遣って、傑は他愛ない会話を始める。

「今日も仕事だったんですか?」

「あ、はい……。私の場合、家で仕事をしているので、ずっと仕事のような、プライベートのような。何をしても仕事のことを考えている感じがですが」

デザインが浮かばないときは、ネットサーフィンをしたり、動画を見たりして時間を過ごしてしまふ日もある。だけど、そうやってダラダラしたあとに、ふとアイデアが浮かんできたりするのだ。

「自分でデザインを考えるっていうのがすごいですよね。僕にはできません」

「そうですか?」

「そういうセンスはないから、尊敬します」

(褒められた……)

そんなふうに通ってくれた男性は初めてだ。というか、ビジネス以外で男性とこうして話をする機会なんてそもそももないのだけど。

そうやって自分の話をしていると、少しずつ肩の力が抜けてきた。

しばらくすると車は左車線に移動し、あるマンションの近くでウインカーを出した。

「僕の家はここです」

「すごいところですね……」

車の窓からマンションの一番上を見ようとすると首が痛くなるほど、高層だ。港区エリアの一等地に立地しているタワーマンションは、夜の街に溶け込んで美しく輝いている。

「ご実家にお住まいかと思っていました」

「四六時中家族といえるのは疲れますし、ずっとひとり暮らしをしています」

マンションの地下に潜り、車が停車する。成功者しか住んでいないような高級なマンションの駐車場は、想像以上に広い。

エントランスに上がると、開放感のある吹き抜けの天井に圧倒される。手前には大きなコンシエルジュカウンターがあり、キャビンアテンダントのような格好をしたコンシエルジュたちが風花たちを迎えた。

「おかえりなさいませ」

コンシエルジュカウンターの奥にはレセプションラウンジやプライベートラウンジがあつて、来

訪者や住居者がくつろげるスペースになっている。

タワーマンションの存在は知っていたものの、実際入ったのは初めてで、ついラグジュアリーな空間を隅々まで見入ってしまう。

「こんなところに来たの、初めてです……」

「そうですか？ 意外です。風花さんは驚かないと思っていました」

傑は風花も同じくらしいの生活水準の人間に見えていたらしい。だから、こんなリアクションをするなど予想外だったのだろう。

「昔はそれなりだったかもしれませんが、高校を卒業してから家を出ているので今は一般人です」

小さい頃は名家の娘として、あらゆる習い事をさせられていた。

習字、そろばん、華道、日本舞踊、ピアノ、乗馬など、教育は厳しかったと思う。

私立の名門小学校に入れられ、エスカレーター式に高校まで進んだ。そのあと大学に進学を望まれていたが、どうしてもファッションの道に進みたくて親を説得したと、傑に話す。

「高校を卒業してから……ですか」

「親に決められたルールを歩くのに疲れちゃったんですよ。だから、家を出て好きな仕事をして、ひとりで暮らしています。だからこんな華やかな生活とは無縁でした」

「別に華やかな生活なんて送っていませんよ。利便性がいいからここに住んでいるだけです。僕はワンルームマンションでも、ボロ家でもいいんですよ。そこに大切な人がいるなら」

最後の一言にドキッと胸が跳ねる。

(見た目通り、誠実な人って感じの言葉だなあ)

そんな素敵な考えを持っている人に、改めて失礼なことをお願いしたのだと自覚して心が痛む。そうやって話しながら歩いていると、やがて広々としたエレベーターホールに出た。低層階用のエレベーターと、高層階用のエレベーターに分かれている。

「うちは三十二階の角部屋です」

「三十二階……上のほうですね。最上階は何階なんですか？」

「三十二階です」

(ほう……最上階に住んでいるのね……)

さすが華月屋の御曹司。どこまでもセレブリティだと思いつつ、エレベーターに乗り込む。住居フロアに到着し、案内する彼の後ろについて内廊下を進んでいく。

「ここです」

扉を開けて中に入ると、広々とした玄関が現れた。白で統一された壁紙や床は、清潔感がある。

「きれいですね」

「部屋が汚いと落ち着かないんです」

「そうですか……」

風花は自分の部屋を思い出して、傑には絶対に見せられないかと遠い目をする。

ゴミ屋敷とは言わないが、仕事の資料で溢れているのだ。

「お腹空いていますか？ 食事にしようと思うのですが、いかがでしょう」

「あ、はい……。お腹、空きました」

昼に起きてから、そのまま仕事をしていたので空腹だ。

「適当にオーダーしておいたので、もうすぐ届くはずですよ。風花さん、お酒は飲めます？」

「はい」

リビングにバッグを置かせてもらい顔を上げると、壁一面が窓になっていることに気づく。大きな窓から東京湾とビル群が美しく輝く夜景が広がり、ロマンティックでうっとりと思惚れた。

「わあ……きれいな景色」

「どうぞ、ソファに座ってください」

窓に張り付いて外を眺めていた風花に、傑はシャンパングラスを差し出す。ゴールドに輝くシャンパンからキラキラとした泡が揺らめいていた。

「ありがとうございます」

「まずは乾杯」

傑と風花はソファに座り、お互いのシャンパングラスを重ねて乾杯をした。

シャンパンに口をつけると、微炭酸が口の中を刺激して心地いい。口あたりのいい味わいと爽やかに香るアルコールが飲みやすい。

「ふう……」

「お口に合いましたか？」

「はい、とっても美味しいです」

まだそんなに飲んでいないのに、もう気持ちがふわふわしてきた。このあとの料理も楽しみで、自然と顔が緩んでくる。

「この前のお見合いのときと、雰囲気は違いますね」

「そうですね？ あ、そうか。この前は着物でしたもんね」

髪も纏めていたけれど、今日は緩く巻いて下ろしている。雰囲気が違って当然だ。

傑は、着物のしおらしい雰囲気が好きなのだろうか。それとも今のような感じ？ と、ふと考える。もしかして今日しているような格好よりも、もっとカジュアルなほうが好きかもしれない。

(……って、そんなこと気にしないでいいじゃない)

恋仲になる予定じゃないし、好きになってもらう関係でもないし、風花は頭の中を切り替える。

自宅に帰ってきてリラックスしたのか、傑はジャケットを脱ぎ、ベスト姿になった。そしてシャツの袖ボタンを外し、捲り上げる。血管の浮かぶ男らしい腕と、手首にある大きめの腕時計が色っぽくて目が離せなくなる。

「お待ちして申し訳ない。そろそろ料理が来ますよ」

「は、はい……」

空腹に耐えきれなくなると、彼の時計を見てそわそわしていると思われたようで恥ずかしい。

しばらくすると、インターホンが鳴り、お店のスタッフらしき男性がやってきた。

料理を運んできただけでなく、テーブルの上にちゃんと並べてレストランのように準備をする。

広いダイニングテーブルの上に、美味しそうなフランス料理が並ぶと、風花と僕は向かい合ってそれらを食べ始めた。

前菜の盛り合わせプレートと、じゃがいものポタージュ、牛ほほ肉の赤ワイン煮込みなど、どれも絶品で声を上げずにはいられないほどの美味しさだった。

「んー、美味しい」

「この料理、すごく美味しいんですよ。ポリウムもあるし」

このマンションの近くにある人気店らしい。今日はケータリングしてもらったが、普段はこういうサービスはしておらず、僕が昔からよく利用している常連だから特別に受けてくれたそうだ。

「遠慮せずにたくさん食べてください」

「はい、ありがとうございます」

目の前には、眉目秀麗な男性。彼の背景には東京の綺麗な夜景が広がり、テーブルには美味しい料理とシャンパン。ふたりだけの空間で、気兼ねなく会話できる雰囲気も心地いい。

「風花さんは、普段どのような過ごし方しているんですか？」

「私、ですか？ えっと……月に数回ミーティングで会社へ行くぐらいで、それ以外は家でデザインを考えています」

「ずっと家にいるんですか？」

「そうですね、ほぼ家です。貫地谷さんは？」

と、質問し返したところで、はっとする。

(何、気安く聞いているんだろう。聞かれたら嫌だったかもしれないのに)

聞いて大丈夫だっただろうかと不安に思うが、僕は嫌な顔ひとつせずに答えてくれる。

「僕は普通のサラリーマンと同じように、毎日出社しています。店頭に立つことはなくて、オフィスで仕事をしているんですよ。たまに関西のほうへ出張がありますね」

華月屋は、東京をはじめとし大阪、兵庫、広島……と西日本にも店舗がある。出張は、その店舗の視察のためなんだとか。

「お仕事だから大変でしょうけど、出張って憧れます。私、あまり旅行に行ったことがなくて」

「家族旅行はしなかったんですか？」

「あまり行っただけじゃないですね。父は仕事人間で、いつも店のことを気にかけている人なので、長期的な休みを取ることがなくて。だから旅行に行っただけは、ほんの数回。しかも小学生のときだったと思います」

「へえ……」

ひとり暮らししてからは、専門学生時代の卒業旅行に一度行っただけで、そのあとはコンテストに入賞するために、たくさんのデザインを考える日々だった。仕事を獲得するべく、来る日も来る日も営業をして、少しでも可能性があるならと企業を回っていた。

ゆっくりと旅行をする時間を作るなんて考えられず、ずっと突っ走ってきたのだ。

「風花さんは仕事が好きなんですね」

「はい。もっと有名になって、自分のブランドを持てるくらいになれたらなって思っています」

こんなことを言ったら、叶わない夢だと笑われるかもしれない。けれど、大きな目標を持つて努力していることを恥ずかしいとは思わない。

「風花さんならできますよ。応援しています」

「ありがとうございます」

会話をしているうちに、すっかり緊張が解けた。メイン料理もデザートも食べ終わり、とてもいい時間だったと思いつつ、僕のほうを見る。

「ごちそうさまです。すごく美味しかったです」

「それはよかった」

男性とふたりきりで食事するなんて最初は固くなっていたのに、今はリラックスして僕に笑いかけることができる。

風花が椅子の背もたれに体を預けて、「ふう」と一息ついたところで、僕が真剣な表情で話し始めた。

「あの件ですが」

あの件、と言われて、一瞬何のことか分からず、ぼかんとしてしまふ。

気を抜いていたが、もともとは大事な用件を話し合うためにここに来たのだ。

結婚はしないけれど、子どもだけ欲しいとお願ひしたことを思い出して、急に胸の鼓動が速くなる。

「具体的にどういうふうにしていくか考えました」

「は」

「すぐに進めていこうと思います。それと、これ」

僕が差し出したのは、何かの数値の書いてある紙だった。

「約束通り、僕の体が正常かどうか調べておきました。問題ありませんでした」

僕から差し出された紙には、様々な検査をした結果が載っている。病気はなく、健康体ということだった。

やるとなったら徹底的にやるというスタンスに、自分と同じベクトルでこの件について考えてくれていると感じて心強くなる。

「私も、持つてきました」

風花もクリニクへ行つて検査をしてきた結果を差し出す。特に大きな問題もなかったと報告すると、その結果を手を取った僕はくすりと笑う。

「健康な男女が避妊しなければ、一年以内に妊娠するらしいですよ」

「そう……なんですか」

ということとは、順調にいけば数カ月後に妊娠している可能性があるということだ。漠然と妊娠したいと思っていたが、急に現実味が帯びてきた。

風花はお腹に手をあてて、これから来る予感に胸を弾ませる。

「では、あとは性行為をするだけです」

にこつと微笑みかけられているのに、どこかほの暗くてぞくりと体が震える。



「まずは、お互いにちゃんとできるか確かめる必要があります」

「できるって、何を……？」

「愚問ですね。……セックスに決まっているでしょう」

妊娠の可能性が高い日に連絡して「はい、しましょう」となっても、うまくできなかったら意味がないと彼は言う。

確かにそれはそうだけでも。そうだけど、それって、つまり——

「今から、僕に抱かれてください。僕がどういうセックスをするのか、先に知っておくべきです」

（い、今から!? そんな、急に言われても心の準備ができてない!）

「無理です、そんなの。今日はそんなつもりで来ていません」

「男の家に来るのに、そういうことが起きないと思っていたんですか？」

「はい……」

「はあ……何て人だ。子どもを作りたいって言ったのは、風花さんなのに」

とろんと酔いが回った頭では、それに対しての反論が出てこず、彼の言っていることが至極真っ当な気さえしてくる。

「あの……でも、私……」

心の準備ができていないから今日は本当に無理だと言おうとすると、僕が席を立って風花の手を取る。

「あなたは何もしなくていい。ただ、僕にされることを受け入れるだけでいいんです」

風花の手を顔に近づけて、僕は熱い唇でキスをする。

「あ……っ」

手の甲に唇が触れ、そのあと指先へ移動していく。大事なものに口づけるみたいな行為に目が離せない。

僕が蠱惑的な瞳で風花を見つめて囁く。

「……できますよね？」

逃げ場を失ってしまい、どう答えていいか悩んでいると、彼の手が風花の腕を掴んだ。

「行きましょう」

どこに、と聞く間もなく、寝室へ連れて行かれてしまった。

他の部屋と同じように、白やベージュで統一された整然とした部屋の中に、ダブルサイズのベッドが置いてある。この部屋にも大きな窓があり、美しい夜景を見渡すことができた。ベッドサイドテーブルの上にあるスタンドライトが淡く照らす中、僕と風花はベッドの上に向かい合って座る。

「風花さん」

さっきまであんなにクールな目で見てきていたのに、今は熱の宿った甘い眼差しを向けてくる。

ただ単に性欲のはけ口にされているだけかもしれないのに、その色気を含んだ視線から逃げられない。

「体の相性って、あると思うんです。あなたの体で確かめてください」

「うう……」

(貫地谷さんを誘ったのは私。子どもが欲しいと望んだんだから、貫地谷さんは悪くない)

彼は望まれたことに全力で応えようとしてくれるだけだ。だから、欲望のまま求められて当然なのだ。

(でも——)

風花が経験したのはかなり前で、思い出せないほど朧げな記憶となっている。

だから、久しぶりに男性と肌を合わせることに緊張を隠せない。

「顔を上げてください。キスは嫌ですか？」

そう聞かれて、勢いよく首を横に振る。

「体だけの関係だからキスをしない」と言う人がいると聞いたことがある。傑がキスが嫌か聞いたのは、風花がそういう考えを持っているのか確認したかったのだろう。

傑とキスをするのが嫌だから俯いているわけではなく、どんな顔をして彼を見ればいいのか分からないだけだ。

「じゃあ、こっち向いて」

顎にそっと手を添えられて、顔を上げるように優しく導かれる。

頬が熱い。きつと煌々とした光の下なら、赤面していることを気づかれたはずだ。薄暗い部屋でよかったと心底思う。

「何て表情をしているんですか。泣きそうな顔をして」

「違います……。わ、たし……こういうの、慣れてなくて」

「え？」

傑は目を見開き、驚いた表情を浮かべる。

「前にしたのも、ずいぶん前で……うまくできるか分からないんです」

「ずいぶん前って……どのくらいですか？」

「……八年、ぐらいです……かね」

風花の話を聞いて、傑は絶句している。八年も男性と何もなかったのか、と呆れられただろうか。伝えてしまったてよかったのかと不安が過る。

「そうですか。慣れていないのに、よくこんな大胆なことを僕に頼みましたね」

「そ、それは貫地谷さんが、したいって言うから……」

風花としては、精子を提供してもらって、人工的に妊娠しようと考えていた。だから、こんなふうに体を重ねることは想定外だったのだ。

「そうですよ。ちゃんと愛し合って子どもは作りたいですから」

顎に添えられていた指が動き、風花の下唇をなぞっていく。太くてしっかりとした男性の指が、風花の柔らかな唇の弾力を楽しむ。

「たっぷりと愛してあげますよ。すぐに妊娠してしまうくらいに」

囁くような低い声に全身がゾクツと戦慄いた。まだ何もされていないのに、お腹の奥がズクンと甘く痺れる感覚がする。

(か、貫地谷さんの色気がすごい……)

目を細めて狙いを定める野性的な瞳に囚われているうちに、彼の顔が近づいてくる。とろんとした雰囲気に吞まれて、ゆっくりと目を閉じた。

すると、すぐに唇に柔らかな感触がする。

(貫地谷さんのキス……気持ちいい)

唇を重ね合いながら、傑の手が風花の頬を撫でていく。耳のあたりにくると、ゆっくりと髪をかき上げて、首筋まで下りていった。

昔もキスははしていたのに、全く別物みたいだと感じる。

唇同士が触れ合っているだけで高揚していく。優しく肌に触れられているのも気持ちがよくて、うっとりとしてしまう。

「……っ、ふ……あ」

触れ合わせているだけでは満足できなくなってきた頃、風花の唇を割って彼の舌が入り込んできた。熱くて柔らかな舌が、口腔内を味わうように動く。

(頭がふわふわする。このキスに絆されて、何もかも許してしまいそう……)

甘やかすみたいに優しく舌を絡ませてくる甘ったるいキスに身を預けていると、いつの間にか彼の大きな手が体を撫で始めていた。最初は肩や腕にあった手が腰のあたりに触れ、小さく震える。

「大丈夫ですよ、優しくします」

「や……っ、そうじゃ、なくて……。お、風呂とか……その……」

「会う前に入ってきたんでしょう？ 風花さんの肌から、いい香りがしていますよ」

「う……」

(確かにそれはそうなんだけど)

ただ、こういうことに備えてお風呂に入ってきたわけではなく、昨夜そのまま寝てしまったからだ。入ってから数時間しか経っていないものの、それでも気になる。

「待って。貫地谷、さん……」

名前を呼ぶと、一瞬、傑の動きが止まった。

傑は風花のことをじっと見つめ、冷然とした態度で告げる。

「申し訳ないですが、止めるつもりはありません。諦めてください」

女友達が、少し前にいいなと思っていた男性と一晩過ごしたときに、体の相性が合わなくて最悪だったと愚痴っていたことを思い出す。

女友達は男性に攻められたいタイプで、相手の男性も攻められたいタイプの人だった。だから、男性がとてつもなく受け身で興奮したとか。

あのときは他人事として聞いていたが、今その問題が現実として風花の目の前にある。

(さすがだ……。経験豊富な人は、いろいろと分かっているんだな……)

風花と違って、傑は今まで何人とも経験しているはず。相性の大切さを知っているからこそ、先に確かめておきたいと思うのだろう。

頭の中でそんなことを考えていると、傑が頬を撫でてきた。

「ほら、目を閉じて。キスができませんよ」